

ロソ合同葬儀の感があった。日本人もロシア人もうなだれている。しかし、収容所長アントノフスキーはイワノフの遺体を日本人墓地に葬ることを許さなかった。日本人墓地の隣に日本人とロシア人の手によって埋められた。

それから数日の間、この2つの墓標にはロシア人の手によって花が飾られていた。

入隊から終戦までの回想

島根県 塚田 信雄

何といっても四十五年前のことであり、記憶をたどり、友人の体験をも参考にして記述した。

私は昭和二十年三月十五日終戦の年、最後から二番目の初年兵として黒河省瑯璁、満州第六一二部隊へ現役兵として入隊した。そしてわずか三か月の速成教育ののち、一期の検閲が終わりホットする間もなくソ連の来襲に備え、三十キロくらい離れた孫吳よりの二站（ニタン）

の山中で陣地構築にはいる。

時はすでに二十年六月末になっていたが、部隊の主力は汗みどろで毎日壕掘りの最中であり、原隊は留守の兵員がわずかに残っている程度であった。作業は機械は全くなく、円び、スコップ、ツルハシ等を使用しての人力のみである。方法は山頂及び中腹に散兵壕（深さ二メートル、幅一メートルくらい）を幾重にも掘り、そのところどころに溜まり場として数人が寝泊まりできる程度の穴を掘り、その上に周辺に生えている白カバ、ナラ、クヌギ等の雑木の丸太を渡し、その上に葉のついたままの枝でおおい、さらにその上に土を盛り、芝を張り、草や木の枝でかぶせ、上空から見てもわからぬようカモフラージュをする。床には土間に丸太を並べ、葉のついた小枝や乾草を敷き、ベットの代用とした。まるで古代人の住居そのままである。電気もなければ水もない、ローソクとランプだけの雑魚寝の兵舎で、朝六時から夕方日が沈むまで掘り続けた。運よく土の多いところに出会えば一人で三―四メートル進むが、岩石の多いところは一日中ツルハシを主に使い、作業能率も半分以下である。

また、朝早いうちは蚊やブヨが無数に出るし、陽が高くなると今度はアブに悩まされ、北満とはいえ日中は三十度以上の暑さでクタクタになり、昼休みの一時間は飯もそこそこに死んだように寝た。散兵壕を掘り終わると今度は山の下で戦車壕掘りになった。これまた大変な仕事で、幅五メートル、深さ四メートルくらいの大きさを、戦車の進行を食いとめる壕である。散兵壕と異なり、深さが深いため一回では放り上げることができず、二回ばねでなければだめで、この場合身長の高い者ほどえらく、高い者は楽で、柄の長い円びで力いっぱい反動をつけながら土を放り上げるが、空腹になると力が入らず、頭から土をかぶりながら素裸で掘り続けた。

一か月以上の暑さの中、毎日土方仕事で昼は握りめしと梅干しくらいで、二十代の若者ながら栄養不良で体力はガタ落ちで、目玉ばかりギョロギョロしており、いつ開戦になるか逼迫した状況なので、日曜、休日は一切なく、無理な労働である。しかも糧秣倉庫や弾薬庫があるでもなく、いざ戦争になったらどうして補給されるだろう。谷間の道路わきに簡単な炊事場の建物があり、そこ

には数日分の食料しかなく、途中の道路が遮断されたらどうなるか、心細い限りであった。後方の壕陣に堅固な永久陣地があるのに、なぜこんなチツボケな陣地をつくるのだろうか。爆撃、砲撃、戦車の攻撃に対して何日持ちこたえるか、だれも不安な気持ちを持っていたと思うが、当時口にする者はいない。

昭和二十年八月九日早朝、ソ連軍はソ満国境の黒龍江を渡り、飛行機と戦車で一齐に攻撃をしかけ、いよいよソ連の参戦である。陣地構築作業は直ちに中止され、守備を固めるために糧秣、弾薬、被服の補給が始まり、我々兵隊にも新しい軍服が支給された。朝から敵の飛行機が一機飛来して偵察を始める。高度は二、三百メートルの低空なので、各所から軽機関銃、小銃で射撃するが、敵機はゆうゆうと飛び去ってしまい、射撃のチャンスはわずか数秒しかない。次に来たら今度こそと思ったら、所在を知らせるので射撃してはいけないと命令が出た。木陰に隠れるのみで、昨日までの壕掘り作業がなくなつて体は楽になった。

開戦二、三日は何事もなく平穩無事で班長も古年兵も

やさしく、兄弟みたいに人が変わり、生死を境にすると心境が変化するみたいである。このころより毎日雨が降り出しなかなかならず、今まで乾いた壕も道路もドロコになり、一日――三回の弾薬の担ぎ上げ、飯上げに大変な苦勞をした。雨が降り続くと壕の天井からの雨だれで、被服も毛布もぬれ、そのまま寝ることになる。生命のことはあまり考えず、戦争は訓練や土方がなくなり、雨さえ降らねばのんきでよいと思うようになった。また、戦争がなければ満州の最北端、小興安嶺の山中は平和郷であり、陽が照れば暑いが木陰に入れば涼しく、日本の軽井沢のように快適な生活ができるところだろう。

八月十三日から十四日ごろと思うが、師団司令部のある南東四十キロの孫呉方面で激戦が展開されたか、遠雷のような砲声が聞こえ、夜になると市街が燃えているのや夜空が赤く見えた。敵は礮陣、朝水を突破して我が方の陣地へ迫ってくるとの情報も入り、八月十六日ごろから敵は段々増えてきたようだ。二站の急造陣地は小興安嶺の小さな山の連なる、山峽の両側の山の中腹から山頂にかけて壕を掘り回した簡単なものである。そして谷を一

本道が走り、これを突破する以外先に進めない天然の関所みたいなところであった。敵は二、三両の重戦車で一斉射撃を加えた。我々のいる山の上から戦車まで三、四百メートルで、手にとるように見え、弾丸は当たっているが相手は平気で砲塔を回しながら今度は撃ち込んできた。陣地周辺の雑木に弾の当たる音はするが、こちらも損害はなく、打てば反撃が強くなるので眺めていた。二十分くらい戦車を停止して撃っていたが、そのうち帰ってしまった。

翌日になると敵の砲撃が激しくなり、隣接の部隊と交戦しているらしく、一日中砲声が聞こえる。砲撃の合間に山の下にある弾薬、食料の荷上げに十人くらい出かけたところ、迫撃砲の射撃を受け、至近距離に弾が飛来したのであわてて近くの壕に避難した。我が方は飛行機はもちろん戦車も一台も出動せず、みずから受け身の戦闘で情けないこと限りない。こうして小戦争をしているうちに運命の日がやってきた。

たしか八月二十二日と思うが、谷間の向かい側に大隊本部があり、白旗が掲揚されており、ソ連の兵士らしき

姿もあり、馬もいて人の動きも活発で、どうしたことだろう、敵が降伏してきたのか、きっとそうだろう。日本は勝ったんだとまだ寝ていた戦友たちを起こした。みなキツネにつままれたような不思議な光景を見ていたが、どうも様子がおかしい。敵も昨日あたりから全然撃ってこない。そうこうしているうちに、日本は負けたりしいとヒソヒソ話が伝わってきた。そのうち伝令が来て「日本は戦争に負け、八月十五日終戦の詔勅が出された」とのこと。そんなばかなこと、戦争は始まったばかりでこれからだと半信半疑で憤慨していると、一時間以内に武器を捨てて山の下に集合せよとの命令が出た。ボヤボヤしていると、後方の陣地から丸腰の兵隊が陣地を捨て、おりて行くではないか。これは大変、本当らしい、早くおりないと一斉射撃を受けるとの情報も入り、あわてて身のまわりの日用品だけまとめて山を降りた。

短い戦争はこうして終わり生命は助かったが、これからどうなるか全くわからず、捕虜となって銃殺かそれとも日本に帰れるか判断がつかない。山の下の広場に一個大隊以上の人間が集まる。ソ連兵が自動短銃を小わきに

抱え、我々の集団を取り囲み、まだ武器を持った者に中央の一所に、まきを積むように積み重ねるように命令し、本当に丸腰になってしまった。それでも将校は帯刀を許されたようだ。そして、数時間たち各中隊の集結が完了し出発ということになった。それまで待機していたソ連軍の戦車、トラック、装甲車等はドンドン孫呉方面へ進んで行く。将校はトラック、我々は徒歩でどこへ連れてゆかれるかわからない。警戒兵の自動小銃に威嚇されながら行軍して孫呉に着き、関東軍が備蓄した軍需物資を本国へ輸送するための貨車積み込み作業を約一か月間やらされた。そして、十月上旬ポツポツ寒さがくるシベリアへ連行され、苦しい抑留生活が始まる。

乏しい食糧

熊本県 高瀬潤 吉

入所した最初の冬は、抑留者にとって最悪の年であった。体験したことのない厳冬、乏しい食糧、そして重労働